



## 大会概要



2018年に改定された幼稚園教育要領等の中で重要なポイントとして「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」が育ちを捉える視点として位置づけられました。

その中でも特に意欲や社会性や自己制御といった心の育ちについては“非認知能力”というワードを中心に研究分野でも取り上げられることが増えてきました。“非認知能力”は、感情知性（Emotional Intelligence）とほぼ同義語と捉えることができますが、定義するとなると難しく、敢えて述べるのであれば、認知・測定できない力（これまでもとても大切にされてきた能力）といい表すことができます。

そこで、今回のNCN研究大会では、改めて非認知能力とは何かを整理したうえで、幼児期からの非認知能力の育ちが小学校以降の教育、子どもの育ちにどのような影響を及ぼすのかという視点で情報を共有し、今後の幼児教育・保育の実践、そして養成校としての教育内容について考える機会となると捉え、大会のテーマを考えました。

## 講師 プロフィール

専門分野は発達心理学。博士（教育学）（京都大学）。乳幼児期の社会的発達について、アタッチメント理論の視点から親子関係の観察に基づき研究している。幼児教育・保育に関して、国立教育政策研究所に平成28年4月に新たに設置された幼児教育研究センターで主任研究官を務める（2016～2021）。OECD（経済協力開発機構）によって初めて実施された国際幼児教育・保育従事者調査2018について、国内実施機関である同研究所にて調査実施事務局メンバーとして調査実施と報告書作成に従事。国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター主任研究官として（2014～2021）、乳幼児期に続き児童期以降も重要となる育ちとして「非認知能力（社会情緒的能力）」に着目した研究を開始。非認知能力、特にその中核となる社会情緒的能力について、国内の児童・生徒のべ1万人以上を対象とした大規模調査の設計・実施を担当。現在も児童・生徒への新たな調査を展開中。

現在、関西外国語大学外国語学部教授。国立教育政策研究所客員研究員（プロジェクト研究「社会情緒的（非認知）能力の発達と環境に関する研究：教育と学校改善への活用可能性の視点から」発達調査チームチーム長）。臨床発達心理士。

